

令和 2 年 4 月 7 日現在

機関番号：11301
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：17K17482
研究課題名（和文）小児がんを抱える子供の闘病体験を意味づけていく親への看護支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a Nursing Care Program for Parents Making the Meaning their Experience of Fighting Illness in Children with Cancer

研究代表者
入江 亘 (Irie, Wataru)

東北大学・医学系研究科・助教

研究者番号：60757649
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究結果から、小児がんを抱える子供の闘病体験を親が意味づけていくための看護支援プログラムの枠組みとして（1）子どもががんになった事実を容認すること、（2）がんを抱えながらの生活に順応すること、（3）がんの意味を持つこと、（4）がんの恐怖に対処することの4つの視点が示された。内的な熟考に着目する支援というよりもむしろ、実生活への順応を通じた現状への統制感覚の確保を支援していくことが重要であると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究結果の学術的意義は、これまで小児がんの子どもをもつ家族の意味づけを支援するうえでの具体的な着眼点が課題となっていたなかで、小児がんを抱える子供の闘病体験（病気罹患から治療終了までの体験）を親が意味づけていく過程を精緻的に解明できた点である。今後これらの支援枠組みに基づき、小児がんの子どもをもつ家族への実際のケアの実装や生活環境への支援の充実が取り組まれることで、より社会的意義に貢献できると考えられる。

研究成果の概要（英文）：As a result of this study, four frameworks were clarified as nursing care for parents to make the meaning of fighting illness in children with cancer: (1) accepting the fact that their children had cancer, (2) adapting to life with cancer (3) grasping the sense of cancer, and (4) dealing with the fear of cancer. Healthcare professionals are not required to focus on internal ruminations of parents, but rather to help them maintain a sense of control through adaptation to actual life.

研究分野：家族ケア

キーワード：意味づけ Posttraumatic Growth 間合い 見通し 実生活への順応

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

子供のがん罹患により親は子供の命や家族の将来像への脅威に晒され、長期に及び入院加療のなかで子供の苦痛を追体験する。こうした家族への支援方略の視点として、意味づけの重要性が注目されている(塚本他, 2012)。しかし、病気を抱える子供の親を対象とした研究は骨肉腫経験者の親への実態調査1例のみで(Yonemoto 他, 2012)、病気を抱える子供の親の意味づけに対する効果的な看護支援の構築を目指した研究はわが国で取り組まれていなかった。

そこで研究者は、意味づけの概念において研究が特に広く行われている Posttraumatic Growth(PTG)に着眼し、小児がんを抱える子供の親における全国初の PTG に関する多施設調査を実施した。その結果、子供の成長の実感、周囲の病気の親や職場・同僚からのサポートといった小児がんの子供の親に特徴的な意味づけに関連する要因が明らかになった(入江他, 2016)。加えて、小児がんの子供の親の PTG は子供のがん診断直後に生じる親の衝撃体験と関連していた。しかし、子供のがん診断直後に生じる親の衝撃体験がどのような過程を経て PTG に達するのかわかっておらず、支援をより具体的に検討していくための課題となっている。

2. 研究の目的

病気を抱える子供の親の意味づけに対する効果的な看護支援の構築を目指すうえで、本研究では小児がんを抱える子供の闘病体験(病気罹患から治療終了までの体験)を親が意味づけていく過程を精緻的に解明し、小児がんを抱える子供の闘病体験を親が意味づけていくための、効果的なタイミングや具体的な支援内容を包含した看護支援プログラムの開発を目指すことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 小児がんを抱える子供の闘病体験(病気罹患から治療終了までの体験)を親が意味づけていく過程の解明(2017年度~2018年度)

調査は半構成インタビューによる質的帰納的研究デザインにより行った。造血器腫瘍によって入院加療を経験したのち、3年以内にある子どもの親を調査対象とした。

(2) “長期内服を要する子どもの内服困難”の看護援助の可視化(小児がんを抱える子供をもつ親の入院生活上の順応を阻む要素の一つの視点から)(2019年度)

研究(1)の結果および先行研究の知見を統合し、まず支援に必要な要素を抽出した。抽出にあたっては、Park の提唱した意味づけ理論(2010)にある上位の抽象概念を基盤に、小児がんの子どもをもつ親の具体的な事象を同定した。特に親の生活上の順応を阻む要素の一つとして“子どもの内服困難”に着目し、長期的に内服を要する子どもへの看護師の援助の特徴を可視化するため、臨床経験5年以上の看護師を対象にインタビュー調査を行い、援助における意識と行動の観点からデータを質的機能的に分析した。

4. 研究成果

(1) 小児がんを抱える子供の闘病体験(病気罹患から治療終了までの体験)を親が意味づけていく過程の解明

27家族に調査を依頼し、最終的に15家族17名がインタビュー調査に参加した。17名の内訳は、父親5名(29.4%)、母親12名(70.6%)であった。分析の結果、白血病の子供をもつ親が心的外傷後に子供のがんとの間合いをとれるようになるプロセスが明らかとなり、26の概念、11のカテゴリ、1つのコアカテゴリで構成された。ストーリーラインを以下に示す(【】はカテゴリ、<>は概念)。

親は子供が白血病(がん)であることの診断や可能性を告げられることで<想定外の現実をつきつけられ>たり、<想定外の現実過ぎてピンとこない>といった【衝撃を受け】ていた。現実に対して<子供を失うかも知れない漠然としたイメージを抱き>ながら<生じている事態を探索し>、事態を理解するために【子供のがんがどういうものかを知ろうと】試みていた。一方で<子供のがんがどういうものか解>ったとしても、子供の様子との乖離やあり得ないという認識から【子供ががんであることを受け入れられ】ず、<子供ががんになった理由を探>っていた。

【子供のがんがどういうものかを知ろうと】したり、【子供ががんであることを受け入れられない】と感じるなかで、親は【子供を失う恐怖と未来への不安が迫り来る】感覚をもち、さらに実生活では次々に親としての治療や生活における対応、判断を迫られることで、【子供のがんによって押し寄せてくる闘病の日々に心も体も吞まれ】ていた。自身の思いと対応を迫られる状況の乖離に対処するために【子供のがんとの間合いをと】り、逃げ場のない状況に置かれるなかで<子供のがんに立ち向かうことを覚悟>していた。

子供のがんとの間合いのなかで、初めは<何とかして今日を成立させる>ことに精一杯の生活を送っていた。生活を送るなかで時には、心理的に<押し寄せる闘病生活の日々から解放され>る時間をもち、次第に<闘病生活の日々をこなす>ことができるようになり、さらに<子供のがんを抱えながら送っていく生活が見える>ようになることで、【子供のがんを抱えながらの生活に順応】できるようになっていった。

子供のがんを抱えながらの生活に順応できることによって、<子供のがんと意図的に向き合う>ことを扱えるようになり、<子供ががんであることを意味づけよう>と試みながら、【子供

のがんとの間合いを取り直す】ようになっていった。

【子供のがんを抱えながらの生活に順応】しようとしたり【子供のがんとの間合いを取り直】そうとするなかで親は、【子供を失う恐怖と未来への不安が迫り来る】感覚をその都度感じながらも、間合いの取り直しを何度も繰り返すなかで【子供のがんとの間合いがとれるように】なっていた。また、【子供のがんを抱えながらの生活に順応】しようとしたり、【子供のがんとの間合いを取り直】そうとするなかで、親は<大切にすべきことを考え>、それを通して<大切にすべきことに気づ>いたり、<自分に価値あるものが明確になる>ことにつながっており、【自分にとって真に大切な物事がわかる】ようになっていった。<大切にすべきことに気づく>ことや<自分に価値あるものが明確になる>ことは Post-traumatic Growth の概念として位置づけられた。このように白血病の子供をもつ親が Post-traumatic Growth に達する内的プロセスは、【白血病の子供をもつ親が子供のがんとの間合いをとれるようになる】ように臨むなかで生じていた。

いつでも<一緒にいてくれる存在>や<自分をとりまく温かい環境>があることだけでなく、<気持ちのもち方や考え方、生活のこなし方を導いてくれる存在>がいることや、間合いをとろうとする親の<背中を押してくれる存在>といった【子供のがんとの間合いをとる親を支える環境】があることは、がんとの間合いをとろうとする親を常に下支えしていた。

本研究結果から、(1)子どもががんになった事実を容認すること、(2)がんを抱えながらの生活に順応すること、(3)がんの意味を持つこと、(4)がんの恐怖に対処することの4つの視点が、親の意味づけを支援するうえでの重要な要素であることが示唆された。内的な熟考というよりもむしろ、実生活への順応を通じた現状への統制感覚の確保を支援していくことが重要であると考えられた。

(2)“長期内服を要する子どもの内服困難”の看護援助の可視化

看護師経験14年から27年、小児看護経験7年から19年の看護師5名(うち3名小児看護専門看護師)が調査に参加した。

その結果、長期内服を必要とする患児への内服援助に対する看護師の意識では【内服の始まりが大切だ】【内服期間を意識しない】【毎日の継続が大切だ】【継続できないこともある】【患児が内服できる条件を見定める】【エンパワメントする】【患児の意向に沿う】【患児が安心して過ごせるように関わる】【大切な薬は飲まないといけない】【内服につまずいた時に関わる】【退院後を予測する】【他職種連携を志向する】【親のことを気にする】【患児は苦痛を経験している】【患児には支援するタイミングがある】【患児は内服することを理解する】【患児は内服できるようになる】の17カテゴリが抽出された。長期内服を必要とする患児への内服援助に対する看護師の行動では【必要性の理解を確認する】【説明する】【飲ませ方を工夫する】【強制力を働かせる】【内服確認する】【退院後の内服を後押しする】【親と関わる】【他職種で連携する】の8カテゴリが抽出された。

看護師の意識では、「内服の始まりが大切だ」「退院後を予測する」といった飲み始めや退院前などの内服を重要な場面ととらえていることが明らかとなった。そのうえで行動として、「必要性の理解を確認する」「説明する」といった本人へのアプローチ方法、「親と関わる」「他職種と連携する」といった周囲との共同支援によるアプローチ、さらに「飲ませ方を工夫する」といった看護師自身の内服援助に関するアプローチを選択していた。先行研究と比較すると、「内服の始まりが大切だ」「内服期間を意識しない」「毎日の内服継続が大切だ」「継続できないこともある」「患児が安心して過ごせるように関わる」「退院後を予測する」「他職種連携を志向する」「患児は内服することを理解する」「患児は内服できるようになる」の9つの意識に関するカテゴリと、「退院後の内服を後押しする」「他職種で連携する」の2つの内服援助に関するカテゴリは、特に長期内服に焦点を当てたことで新たに抽出された要素と考えられた。これらの視点を、日々の内服においてキーパーソンとなる家族と看護者が共有することで、実生活への順応を通じた現状への統制感覚の確保に繋がる可能性があると示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Irie W, Shiwaku H, Taku K, Suzuki Y, Inoue Y	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 Roles of Re-Examination of Core Beliefs and Rumination in Post-traumatic Growth among Parents of Children with Cancer: Comparisons with Parents of Children with Chronic Disease	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Cancer Nursing: An International Journal for Cancer Care	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1097/NCC.0000000000000731	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 入江 亘, 塩飽 仁, 名古屋祐子	4. 巻 131
2. 論文標題 日本小児がん看護学会 平成30年度研究奨励賞 小児がんを経験した子どもの親の心的外傷後成長を構成する要素 - 慢性疾患をもつ子どもの親との対比 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北医学雑誌	6. 最初と最後の頁 82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 入江 亘	4. 巻 41
2. 論文標題 病気や障がいをもつ子どものきょうだいのストレスとコーピング, その支援	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小児看護	6. 最初と最後の頁 833-841
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 入江 亘, 塩飽 仁, 名古屋祐子	4. 巻 13
2. 論文標題 小児がんを経験した子どもの親の心的外傷後成長を構成する要素 慢性疾患をもつ子どもの親との対比	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本小児がん看護学会誌	6. 最初と最後の頁 17-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 入江 亘, 塩飽 仁, 鈴木祐子, 井上由紀子	4. 巻 21
2. 論文標題 慢性疾患を抱える子どもをもつ親の就労実態および健康関連QOL (Quality of Life) との関連	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北日本看護学会誌	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 入江亘, 小川恵理子, 大川智子, 山本光映, 塩飽仁, 小澤美和	4. 巻 79
2. 論文標題 小児がんで入院している子どもの父親が抱く入院生活の中での関心事	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 66-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Wataru Irie, Yuko Nagoya, Yukiko Inoue, Akiko Sugahara, Kenji Hayasihara, Yuri Tachibana, Emi Shimoyama, Hitoshi Shiwaku
2. 発表標題 Restructuring an appropriate psychological distance from the cancer in children: parents of children with hematopoietic malignancies.
3. 学会等名 22th East Asian Forum of Nursing Scholars(EAFONS) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 入江 亘, 名古屋祐子, 井上由紀子, 菅原明子, 林原健治, 橋本美亜, 塩飽 仁
2. 発表標題 造血器腫瘍の診断を受けた子どもをもつ親が "子どものがん" と対峙していくプロセス
3. 学会等名 第16回日本小児がん看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 入江亘, 名古屋祐子, 井上由紀子, 菅原明子, 林原健治, 橋本美亜, 入江千恵, 小澤美和, 永瀬恭子, 佐藤篤, 岩崎光子, 笹原洋二, 力石健, 塩飽仁
2. 発表標題 白血病の子供をもつ親が心的外傷後成長に達するプロセスの核となった問合いの再構築
3. 学会等名 第17回日本小児がん看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	塩飽 仁 (Shiwaku Hitoshi)	東北大学大学院・医学系研究科・教授 (11301)	研究のデザインおよび調査結果の解釈において助言を得た。
研究協力者	小澤 美和 (Ozawa Miwa)	聖路加国際病院・小児科・医長	データ収集協力および調査結果の解釈の助言を得た。
研究協力者	永瀬 恭子 (Nagase Kyoko)	聖路加国際病院・看護部・看護師	データ収集協力および調査結果の解釈の助言を得た。
研究協力者	佐藤 篤 (Sato Atsushi)	宮城県立こども病院・血液腫瘍科・科長	データ収集協力および調査結果の解釈の助言を得た。
研究協力者	岩崎 光子 (Iwasaki Mitsuko)	宮城県立こども病院・看護部・師長	データ収集協力および調査結果の解釈の助言を得た。

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	笹原 洋二 (Sasahara Yoji)	東北大学病院・小児科・准教授	データ収集協力および調査結果の解釈の助言を得た。
研究協力者	力石 健 (Rikiishi Takeshi)	東北大学病院・小児科・講師	データ収集協力および調査結果の解釈の助言を得た。